

学生に魅力ある大学づくりを

若手研究者は一層の奮起が必要 国際化には受け皿の整備が重要

本シリーズの三回目は、十一月三十日に、いわゆる学内科研、若手教官の育成、統合移転後の広島大学の整備などについてインタビューした。聞き手は広報委員長と越智広報委員。

広報委員 〓本日、教育研究学内特別経費が公表されましたが、今回の配分の方針について

学長 〓全部の申請書を読んだ。私も科学者なので、部局推薦の順位と関係なく、真の共同研究的なものを優先し、リーズナブルと思われるものを選んで。旅行中も書類を鞆に入れて運び、暇を見て読んだ。

今回から若手教官の特別枠が設けられましたが「三十七才までの若手が研究業績をあげやすいように、十五人に総額千四百九十万円を差し上げた。書類を読んでみると、パソコンを買ってほしいというのが多かったが、そういうのは困る。文章がなっていないのも見受けられた。今年駄目だからといって諦めないでまた出して欲しい。科研費や学内科研に若手が応募しないのは怠慢だと思う」

広島大学の人材育成について

「そのためにも今回から学内科研の若手枠を設けた。各種の賞を受けた人などを評議会で公表するなど、積極的に顕賞することをやりたい。学長個人としてもささやかだがお祝いをさしあげつもりだ。」



何よりも学生に魅力のある大学にしたい

若手の教官だけでなくよい学生の育成が大問題だ。例えば教員養成の面では、現実には教員就職者はほとんど下している。教育学部で五九%、学校教育学部で七〇%だ。大いに危機感を感じている。今後は公務員試験などを積極的に受けさせ、学生の就職先を確保する努力が必要だ」

広島大学に統一同窓会がないのはおかしいという声がありますが

「今までは過去の行きがかりがあつて仕方がなかった。統合移転の完了と創立五十周年を指して、そういう方向に向かいたい。尚志会報にも巻頭言でそういう意見を述べておいた。統合移転を記念する事業の実行委員会を発足させたので、二十三年かかった移転が終わる一つの節目として、そういうことも考えていただきたい」

学長はかねがね「ロマンのある大学」を、と言われていますが

「何よりも学生に魅力ある大学にしたい。西条キャンパスは日本一広い。この特性を生かしたい。緑化計画の推進もその一環だ。キャンパスの環境整備については文部省にも理解を促してらっている。二月には学部の樹を植えてもらう予定だ。西条キャンパスに樹を育てるには、土質を変えたり維持管

理の経費がかかるが、これも何とか手配したい。キャンパスを見て、受験生がぜひこの大学に来たいというようなものになりたい。将来はシアターのようなものを作って音楽会や演劇や文化講演会なども開けるようにしたい。オペラなら私も出演したい」

移転を機に学部教授会の開催日や全学委員会の開催日を統一するなど、大学運営の合理化を、という声もあります

「まず委員会を整理したい。そして教官が教育研究に要する時間を多くとれるようにしたい。たくさんあるセンターの管理委員会と運営委員会を統合する方向で各センターに検討をお願いしている。今後、事務組織の合理化ということも自己点検・評価の結果を踏まえて考えていきたい」

大学の国際化について

「まず留学生の支援体制を整備したい。現在、毎月一口五百円の寄付をお願いしているが、その制度を知らない人も多いので大いにPRしたい。私費留学生は平成二年には七九%だったが、本年度は六四%に低下している。留学生の総数が増えているので、相対的に低下したということもあるが、私費留学生の受け入れ母体が弱い。ぜひ強化したい。」

大学院の国際協力研究科が発足するし、アジア大会もあり、留学生の力を大いに借りたい。教官や留学生の国際化も大切だが、事務官が国際化することも必要だ。今後、事務官を外国人や外国にエクスポートすることをやりたい。それが大学の真の国際化だと思う」